

【2017 年度第 1 回研究会発表要旨】

屠畜・肉分類と肉利用から観るアムド系チベット遊牧民の価値体系
—青海省東部の遊牧世帯における家畜の屠殺・解体の事例を通じて—

小川 龍之介

2000 年代初頭からおこなわれている中国政府による自然環境保護を名目とした、チベット高原に暮らす牧畜民への強制的な定住化政策により多くの牧畜民が牧畜という生業形態を手放していく現状がある (韓 2011)。そのため、これまで培われてきた牧畜知識というものは急速に失われており、その知識をまとめることは緊急の課題である。

本研究では、多様な知識によって構成されている牧畜知識のうち、牧畜民の屠畜や枝肉解体という肉を得るための知識に焦点を当てた。これまでの先行研究において、家畜から得られる食料のうち乳やその加工・利用については多くの事例があげられ体系的にまとめられている (平田 2013)。しかし、肉や屠畜・枝肉解体を代表的に取り上げた先行研究は少ない。また牧畜民において、肉はハレの食物であり、牧畜社会を構成していくうえで象徴的なものである (山内 1994)。また、屠畜という行為は家畜の命を奪うため、その文化の世界観を特に反映するとともに、その民族のアイデンティティを担う明確な指標となる (小長谷 1992)。遊牧民の肉に対する屠畜技術には、民族的特徴や価値観が深く反映している。従って、牧畜文化を考えるうえで彼らの屠畜・肉文化を明らかにしていくことは極めて重要である。

人や民族がその生業の中で分類をおこなう時、その分類は彼ら独自の基準に基づいている。対象者に、なぜ分類するのかと問うことにより、彼らの持つ基準を把握することができる。この独自の基準とは、彼らのモノの見方の一つであり、彼らの知識の総体を構成する要因となりえる。

そこで本研究は、アムド系チベット遊牧民のヤク屠畜方法の手順、ヤク枝肉の解体手順、各部位ごとの名称と特徴を把握することを目的とした。さらに、これらの行為や分類に着目し、分類基準を検証することで屠畜・肉文化の構造を明らかにすることを目的とした。中国青海省東部で定住化した元遊牧民 A、T 世帯、遊牧をおこなう R 世帯の 3 世帯を対象とし、インタビュー調査をおこなった。

アムド系チベット遊牧民の屠畜方法における特徴は、窒息による屠畜と胸部に手を入れ動脈を切り、血を体外に出さず利用しきることであった。彼らは、この独自の屠畜方法と他民族のおこなう家畜の首をナイフで切り、体外に放血する屠畜方法とを比べ、得られる肉を区別していた。これは肉の風味の違いを分類基準としているためであった。また、屠畜は彼らのチベット仏教意識における不殺生の考え方と矛盾する行為でもある。そのため、この独自の屠畜方法によって彼らは罪の意識を緩和させていた。さらに、他民族の行う異なる屠畜方法と比較することにより、チベット遊牧民としての帰属意識を強調していると考えられた。

枝肉解体により肉部位は大きく 15 種の部位に分類されていた。骨付き肉であれば塩ゆで肉とし、骨なし肉であれば、保存や加工・調理に用いられる。このように骨の有無における肉利用を基準としていた。さらに、骨付き肉の部位は、肉付きや脂肪の入り方というような嗜好という基準により、おいしい肉とおいしくない肉に分類されていた。この分類

された肉の中で、最上とされる部位は、仏僧に献上されていた。この献上という行為は、彼ら尊敬や謙譲の考え方がその要因となっており、この肉そのものが牧畜社会を構成していくツールとなっているということが考えられる。

アムド系チベット遊牧民の屠畜・肉文化は、独自の屠畜方法によって得られる肉の風味、そして枝肉解体における肉利用やその嗜好という彼ら独自の食文化によって成り立っていた。次に、アムド系チベット遊牧民は、屠畜とチベット仏教意識の矛盾を緩和させる窒息や体内放血による屠畜方法と他民族のおこなう屠畜方法を比較することによりチベット遊牧民としての帰属意識を持っていた。そして、この帰属意識が屠畜・肉文化の一つの要因となっていた。さらに、彼らの帰属意識や食文化にも合致する、最上の部位というものが献上されていた。この献上という行為が、遊牧民の社会構築の手段の一つであり、同時に彼らの屠畜・肉文化には社会構築という要因があることが分かった。以上のことから、アムド系チベット遊牧民の屠畜・肉文化は、彼ら独自の食文化、帰属意識、そしてその遊牧民の社会構築により成り立っていることが示唆できた（図1）。

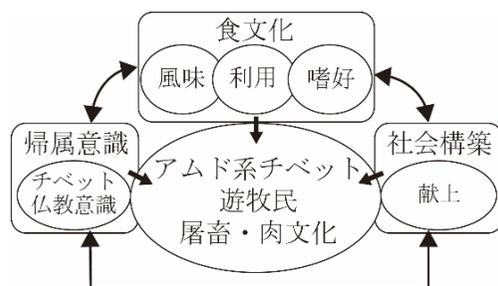


図1 アムド系チベット遊牧民の肉・屠畜文化構

引用文献

小長谷 有紀

1992 『モンゴル万華鏡：草原の生活文化』角川書店出版、東京。

韓 霖

2011 「定住化施策下における遊牧民の生活様式の変容に関する考察：青海省におけるチベット族遊牧民の事例を中心に」『地域政策科学研究』8: 75-99.

平田 昌弘

2013 『ユーラシア乳文化論』岩波書店出版、東京。

山内 昶

1994 『「食」の歴史人類学：比較文化論の地平』人文書院出版、京都。

(おがわ・りゅうのすけ／帯広畜産大学大学院畜産学研究所)

アイヌ遺骨の返還状況とこれまでの経緯

若林 和夫

今回はアイヌ遺骨について 2016 年以後行われた裁判による和解を元にした返還と再埋葬について若干の説明を行った。まず返還に際してその歴史を一覧を用いて説明した。が、目的は果たせなかったと認識している。敬称略。

アイヌ遺骨の収集は、明治維新以後の北海道各地で非人道的な手法や買収によって行われたことが記録されており、土に戻れないまま 100 年以上の時を遠く離れた収蔵庫の片隅で過ごす遺骨も少なくない。元々アイヌについて興味関心の高かった西欧の研究者が、その解剖学的な興味関心や今なお権威を持つ「人種」に関する諸概念を立証するための骨格計測値の比較検討のために収集、利用していた。

その後、日本国内で行われたアイヌ研究のなかでもアイヌに関する骨格計測が行われ、北海道大学には今なお研究者によって道内各地から集められたアイヌ遺骨がアイヌ協会との協議の上で建てられた納骨堂で眠っている。これらの遺骨を取り戻すためにアイヌ協会を通さずに、北海道大学と交渉、裁判の後に遺骨を取り戻そうとするアイヌがおり、和解という裁決であるものの返還と再埋葬を 2016 年に初めて達成した。

コタンの会やその顧問弁護士である市川弁護士によれば、先住民として遺骨の返還を求め、従来のアイヌ協会に依存していた文化財や遺骨等の管理について各アイヌ村落「コタン」の持っていた権利を踏まえてこれらの返還が行われる、それが認められたものとの認識を北大開示文書研究会 HP 等で示している。

一方で、彼らの動きに対する認知がアイヌやアイヌ研究内で一般的ではなく、無用な誤解を受けているように見受けられる。彼らは、アイヌ政策推進会議が基本方針の設定を行う国立アイヌ民族博物館についての危惧を何度もそのウェブサイトや勉強会等で表明している。特に、つい最近まで先住民の自己決定権に反して、非人道的な集め方をされた遺骨を含め白老へ集約し、DNA 分析などを含めた研究利用に関する付記があることに懸念を表明し、土に返さず骨を保管し続けることに強い批判を行っていた。これに関しては、2017 年に入り研究は行わない旨の明示が研究者、アイヌ政策推進会議によって表明され、否定されるに至った。彼らが目指すところは、遺骨のみではなく先住民権の北海道における回復を目指している。2017 年の遺骨返還先の一つ浦幌アイヌ協会では、鮭に関する権利回復について、海外へ出かけ勉強会を持った。アメリカでの現状を学びとっての帰国となったようだ。

これまでアイヌ研究は、近現代史の研究を除き、アイヌの先住民としての権利回復やアイヌという自己表現の内面については、政治的な側面を持つ研究や活動であるため関わりを持つことが少なかった。しかし、先住民研究としてアイヌ研究を見るとき、今後政治的な側面を取り扱えるようであれば、アイヌ研究そのものが問われる事態となるだろう。なぜなら、遺骨を非人道的な手法で集めた研究者は、今なおそのコレクションや文化に関する論文において権威を奮っているのだから。その多面性をどう消化し得るのか、議論をする必要を日々感じる。

参考文献・URL

アイヌ政策推進会議

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/ainusuishin/pdf/290627kakugi.pdf>

植木 哲也

2017 『新版 学問の暴力』春風社、横浜。

北大開示文書研究会

<http://hmjk.world.coocan.jp/>

(わかばやし・かずお／北海道民族学会会員)

アイヌ文化におけるパースペクティヴィズムとアフォーダンス

高橋 靖以

アイヌ文化におけるカムイ（神）の概念に関しては、様々な先行研究が存在する。それらの先行研究は現象学的（phenomenological）な分析（中川 1997、若月 1997）と、コミュニケーションに基づく社会学的（sociological）な分析（中川 2010）に大別することができる。本発表では、先行研究における分析を発展させることを目的として、パースペクティヴィズム（perspectivism）とアフォーダンス（affordance）という二つの観点から、アイヌ文化におけるカムイ（神）の概念について分析をおこなった。

パースペクティヴィズムは「人間的なこともあれば非人間的なこともある異なる主体が世界には存在し、それらの主体は個々の独立した視点から現実を把握する」という概念であり（Viveiros de Castro 1998 : 469）、近年の文化人類学的研究において注目されている。本発表では、アイヌ文化における建築儀礼に関する記述（鷹部屋 1943, 高倉 1968）を検討し、アイヌ文化においてパースペクティヴィズムと判断しうる現象が存在することを例証した。また、アイヌ文化におけるパースペクティヴィズムの特徴として、人間とカムイ（神）の間で言語（langue: Saussure 1916）が間主観的に共有されている点を指摘した。さらに、言語の間主観的共有はパースペクティヴィズムの理論を発展させる上で重要である可能性を指摘した。アフォーダンスは「環境が人間や動物に供与する特性」という概念である（Gibson 1979 : 127）。アフォーダンスは生態心理学の概念であるが、文化人類学的研究においても積極的に活用されている概念である。本発表では、アイヌ文化における薪ストーブ導入の事例（渡辺他 1984）を検討し、アフォーダンスが有効な説明概念であることを例証した。さらに、パースペクティヴィズムとアフォーダンスが一体となって作用していると分析することの有効性を説明した。

引用文献

中川 裕

1997 『アイヌの物語世界』平凡社、東京。

2010 『語り合うことばの力：カムイたちと生きる世界』岩波書店。

鷹部屋 福平

1943 『アイヌの住居』彰国社、東京。

高倉 新一郎

1968 「アイヌ家屋の調査」北海道教育委員会編『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会、札幌、1-25 頁。

若月 亨

1997 「伝統の『復活』をめざして：北海道千歳のカムイノミ」Arctic Circle、22、4-7。

渡辺 仁・西本 豊弘・大島 稔・切替 英雄・篠崎 俊幸・佐藤 知己

1984 『昭和 58 年度アイヌ民俗文化財調査報告書』北海道教育委員会、札幌。

Gibson, J. J.

1979 *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton Mifflin, Boston.

Saussure, F.

1916 *Cours de Linguistique Générale*. Paris: Payot.

Viveiros de Castro, E.

1998 Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*. 4(3). 469-488.

(たかはし・やすしげ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

【2017年度第2回研究会発表要旨】

人とモノの日本的な関係性にみる一側面
—「道具供養」についての考察を中心に—

周 菲 菲

筆者は、2017年10月釧路市立博物館で行われた北海道民族学会2017年第2回研究会で口頭発表の機会に恵まれ、人とモノの日本的な関係性という修士時代から関心を持ってきたテーマについて発表し、学会の先生方の貴重なご意見をを得ることができた。以下はその主な発表内容である。

長い間使い続けてきた道具がその役割を終えた時は、愛惜と感謝の念を込めて供養すべきだとする日本独自の考えから、針供養、庖丁供養、櫛供養、帯供養など道具に対する供養が古くより行われてきた。また近年に電子ペット玩具や携帯電話なども供養の対象物となっており、サブカルチャーにおいて道具霊を取り扱うものが多くなっている。こうした慣れ親しんだ道具への供養は、日本における人とモノの関係性の一側面を物語っている。

「道具供養」という儀礼は、極めて即物的な基層民俗慣習であり、その根源には、人間が自分の手によって作り出した道具の世界、つまり「第二の自然」への宗教的心情が潜在すると思われる。本発表は、「道具供養」儀礼の成立及び変容にまつわる社会的・宗教的背景を分析した上で、関連する中国の民俗との比較を行う。その上において、現在まで継続してきた日本的な道具観と人とモノの関係性の特徴について改めて着目し、道具供養の起源と機能の解明を試みた。

まず、「道具供養」の成立、変容及びその宗教的背景を探った。「道具供養」の起源は明確ではない。文献で確認できる正式な供養儀礼は江戸時代のものであり、それ以前のものには確認できていない。人工的な「モノ」そのものに対して神道式或いは仏教式で「慰霊祭」を行い、塚を築いて埋葬したり、焼却したり、或いは川や海に流したりする。供養されるものには、針、庖丁、鋏などの生活道具や、筆、櫛、帯などの身の回り品がある。それ故、本論は総じて「道具供養」という概念を使っている。総じて言えば、これまでの供養儀礼に関する研究では、供養という民俗儀礼を全般的に論ずるという民俗学からの総合的なアプローチ、或いは事例研究が圧倒的に多く、「道具供養」を中心に系統立てた研究は少ない。道具が生産から消費、そして破棄へと至る過程を辿ることは、日本におけるモノの特質や歴史上の社会構成と文化に新たな視角を与えてくれるのではないかと考えている。

道具供養を考える際、「付喪神」信仰に遡らなければならない。「付喪神」（つくもがみ）の「つくも」は「つくもも（次百）」の訳語で、百に満たない九十九という意味がある。この場合は古きものという意味も含んでおり、九十九（つくも）神とは古物の神や古物の怨霊を意味しているのである。長生きしたために特別の霊力を具えた人のメタファーが、転じて動物、植物、そして道具の妖怪となる、と小松和彦は指摘している。つまり、「九十九神」としての「付喪神」（小松 2013:p371）は本来、並外れて長生きした人間や器物に宿る精霊のことだと考えられる。「付喪神」は、極めて日本の民間的発想であるが、体系化した民族宗教の神道と外来の仏教の思想の影響を受けたことで、「道具供養」という「付喪神」を鎮める行事も神道の「祀り上げ」と仏教の「供養」儀礼の形式を取っている。

また、現代における「供養」の文化は、現代人の「癒し指向」と「自然ブーム」への欲求にうまく適合しており、道具が増えるほど供養されるものの対象も広がってきた。さらに、供養の手段も、伝統的な読経、加持祈祷などの方法だけでなく、道具を集めて祈願した後に資源再利用のために全部回収するという方法も取られており、現代人の「エコ指向」にも合致していると言える。

次は、道具供養の成立の社会的背景を、人とモノとの関係を視野に入れてまとめてみた。日本の歴史のなかで人とモノの関係が大きく変化した時期は三つあると考えられる。第一次は平安末期から室町時代にかけてのほぼ中世に当る時期、第二次は江戸中期から昭和初期まで、第三次は1960年代後半から現在に至る時期である。第一次の中世においては、付喪神が誕生し、古道具を供養するという考えが文献に見られるようになった。江戸時代になると「道具供養」が儀礼化され、広く行われていたという文献と史跡が見られる。道具供養の儀礼方法については宗教者によるが、その儀礼を依頼する人々は当該の道具を「生業」で利用する実利的な目的を抱く関連業者であることから、彼らの人とモノの関係の変容に関する社会的背景を論じてみた。更に、現代の供養を筆者が行ったフィールドワークによる調査結果にそって紹介した。

最後に、「道具供養」と中国の民俗との比較の部分において、付喪神と中国の道具に関するタブーと妖怪伝説を比較して検討し、人とモノの関係性における職人文化と文人趣味について、筆供養と筆塚を中心に、考察の結果を発表した。日本における道具供養に見られる人とモノの関係性には、職人及び職人集団の意識が強く働いているように見受けられる。また、道具供養に含まれるモノに対する考え方がリサイクルに通じる考え方であり、一見不合理な民俗活動は、人間社会の欲望充足のための一方的な自然統率的なものでなく、生態系の均衡を保つための再生産という自然循環的な配慮が含まれていると思われる。江戸中期からみられる道具供養は、「ものを大切に最後まで使いつくす」、「もったいない」精神というリサイクルの思想を裏付けていると考えられると結論付けた。

質疑応答の段階は短かったが、人のモノとの関係性を考える際、古道具の供養ばかりでなく、日本の農村において現在まで行われる農具をまつる習慣と、それに因む日常の道具を大切にするという思考を視野に入れるべきだというご意見を得られた。今後は、日本人は日常生活及び生産の道具とどう向き合うか、その特徴と形成、及び影響について、東アジアという視点でさらに研究を深めたいと考えるようになった。以上、感謝の意を申し上げます。

(しゅう・ふいふい／南京航空航天大学)

地域資源を文脈とした看取り介護の影響に関する研究

林 美 枝 子・永 田 志 津 子

現在、国の政策的誘導で、実施の増加が目指されている在宅での看取りであるが、その環境整備は身近な医療や介護の資源を利用したものとならざるを得ない。「地域完結型社

会」における療養や看取りの受け皿となる「地域包括ケアシステム」の構築に挑むということは、終末期の療養や死の看取りを、地域社会は、地域社会の問題として受け止めることができるのか、という問いの答えを探ることにもなる。看取り介護の当事者遺族から話を聞き、看取り文化の再生を考察した研究はあるが（井藤 2015、林 2016）、具体的な地域を限定し、その医療・介護資源を把握した上で、地域のニーズにどう対応できるのかを調査分析した文化人類学領域での先行研究はまだほとんどない。

本研究の目的は札幌市 K 区の看取りにおける地域資源を調査し、新たな看取り文化の創造やその継承、死生観の変容の可能性について考察する研究の中間報告である。1976年から1977年にかけて日本では病院死が在宅死を上回り、病院で死ぬことが一般化したため、死は医療化した。同時に、昭和中期まで姑から嫁のルートで継承されていた家族介護による自宅での看取り文化は廃れていった。ハイスピードで進行する高齢化は、医療・介護費用の高騰を招き、国は高齢化率 7%程度であった「病院型完結社会」を高齢化率 27.7%の現在「地域完結型社会」へと転換させる政策を展開しているが、その施策的焦点の一つが、多死社会に対する死に場所難民への対応である。特に在宅での看取りへの誘導政策が 2012 年以降は進められているが、在宅死の実施率は増加傾向にはあるもののむしろ横ばいとなっている。むしろ、増加傾向にあるのは施設での死であり、専門職の介護が現実には進行していると言えよう。地域での見取りは以前の在宅見取りと異なり、まったく新たな、地域資源の医療と介護の連携による、地域独自の看取り文化が今模索されつつあり、その現状からは看取り文化の再生としてとらえられるものではないことが明らかになりつつある。

本研究は札幌市 A 区の医療・介護資源におけるキイ・パーソンである医師、訪問看護師、MSW、相談員、主任ケアマネジャーらをインフォーマントとし、現状での在宅におけるターミナルケアに関する聞き取り調査を実施し、新たに創造されつつある看取り文化について考察した。調査対象地域は、札幌市の区の中でも今後の高齢化率の伸びが懸念され、地域コミュニティの強化が求められている地域であるが、在宅診療に関してはあまり充実している地域ではないと言われている区である。当該区の拠点病院での入通院患者への調査からは 51.8%が自宅療養を希望していたが実際にそれが可能であると答えたのはその中の 32.6%だけであった。

聞き取り調査から明らかになったことは、特定地域の看取り資源の情報は、MSW やケアプランを作成するケアマネの手元の個人的記録媒体や頭の中にあるもので、それらの情報は包括的、システムティックに整理されたものではないということである。行政は医療や介護の地域資源一覧の作成には着手しているが、受け入れ可能な病気の種類や、定期診療の範囲、サービス提供者側の看取り観、死の質をどう認識しているかなどの情報は患者側からはほとんどわからない。公的な機関は、特定の医療・介護の機関を推薦することになるような情報の提供ができず、一方患者側には詳細な情報を得るための時間的・精神的余裕がない。医療・介護資源と患者のニーズ、家族介護者のニーズのミスマッチが発生していることが予想された。看取りに関してはマッチングのやり直しは困難で、マッチングの成否が看取りの満足度に大きく影響していることを考えると、患者当事者やその家族介護者が看取り時に選択可能な入用・介護資源の情報の整理と提供のシステムの構築が必要なのではないだろうか。

懸念は地域の医療・介護関係者間で尊厳ある死とは何かの議論が行われていないまま、専門別に経験知の集積が起こっているのではないかということ、そしてその経験知の集積から得られた看取りに関する縦割りの知識を医療・介護の専門職別に継承しようとしているのではないかということである。

本研究は科学研究費（基盤C）「在宅看取り介護の初期段階における困難性とその原因の分析」（課題番号：17k04234、代表：林美枝子）の研究成果の一部を成すものである。
本研究は日本医療大学研究倫理委員会の承認を受けたものである。

引用文献

林 美枝子

2016 「在宅死の看取りにおける家族介護者の現状と看取り文化の構築に関する考察」『北海道民族学会』12: 60-69.

林 美枝子、松永 隆裕、矢野 智之、飯島 美抄子

2015 「終末期の在宅療養や在宅死の意思決定に関する要因の研究－入通院者に対する調査結果から－」『日本医療大学紀要』1: 24-37.

井藤 美由紀

2015 『いかに死を受けとめたか 終末期がん患者を支えた家族たち』ナカニシヤ出版、京都。
(はやし・みえこ／日本医療大学、ながた・しづこ／札幌大谷大学)

石川県輪島市に残された奉納イナウ

北原 次郎太

本発表は、アイヌ民族が製作したと見られるイナウが本州各地に残されている事例を紹介し、主としてその形態的特徴から当該資料がイナウの研究上に持つ意義を述べるものである。

これらの資料は次のような経緯で所在が確認された。

石川県輪島市門前町黒島町の若宮八幡神社に奉納されているイナウについて、戸潤幹雄氏（石川県歴史博物館）から今石みぎわ氏（東京文化財研究所）に照会があった。石川県内では「削りかけの絵馬」として知られていたものの、奉納の経緯も不明で、アイヌ資料であるとの認識はされていなかった（いわゆる北前船建造の際の木くずを奉納したものと考えられてきた）。2015年2月に戸潤、今石、北原による調査の結果、同資料が石川県内に見られる削りかけとは明らかにことなり、アイヌ民族の製作したものであることが確認された。同年5月、戸潤氏の追跡調査により、石川県白山市藤塚神社にもイナウが奉納されていることが判明した。奉納額に記銘があったことにより、これらが北前船関係者による奉納物である事、奉納時期は明治前半であることが知られた。特に白山市藤塚神社のイナウは、奉納が明治元年となっており、年代が判明している資料では国内で2番目に古い資料、その他のイナウも国内の諸資料群の中では古い時期に属する資料である。

さらに同年7月には今石氏の得た情報により青森県深浦町円覚寺にも同様のイナウが残

されていることが確認された。円覚寺のイナウには背景情報が欠けており、寺に所在する経緯も不明である、ただ、深浦が北前船の寄港地であること、円覚寺が海上信仰の拠点となってきたこと、同所のイナウに造形的には石川県の奉納イナウと酷似するものがあることから、同じような経緯によって残されたものであろうことがうかがえた。こうして、日本海北部沿岸のイナウ資料（以下奉納イナウと呼ぶ）が、相次いで知られるようになった。なお、これらの経緯と資料概要は今石（2017）に詳しいので参照されたい。

これらの資料の特徴として、全体に大ぶりの物が多いことが指摘できる。これは、屋外の祭壇に立てられる、格式の高いイナウに見られる傾向である。また、造形的にバリエーションが豊富で、様々な地域で作られた物が含まれていることが推測できる。製作地が判明している他の資料と比較することで、これらの資料の製作地も推測が可能である。

イナウはいくつかの工程を経て各部が成形されて完成する。各部の工程に少しずつ変化を加えることでイナウは様々な形に作り分けられ、細部の差異は、イナウの格式や性別を象徴する。こうした形状と象徴の体系は地域によっては異なることがあるので、イナウの形状を見れば、製作地が推定できることがある。本発表では特徴が現れる部位として、①～④の4点を例示し、奉納イナウとの比較をした。

①a 無加工 b 輪生（北海道式） c 輪生（樺太式） d 輪生（樺太式2）

a は北海道南部、b は北海道北部、c・d は樺太に多く見られる型式。輪島市と白山市のイナウにはa～cが、深浦町のイナウにはb～dが見られた。

②a 無印 b 単印 c 単印（円周） d 複印 e 人面

a は余市など日本海岸の一部と日高地方西部、b は北海道南西部、c は旭川市など石狩川流域、d は北海道頭部から北部、e はウイльта民族・ニヴフ民族のイナウ状木製品に見られる。

輪島市のイナウにはcが、深浦町のイナウにはcとcの変種、dが見られた。なお、dの印を持つイナウの一部にはシトゥコノイエまたはチトゥコノイエと呼ばれる線状の印がほどこされている。同種の印の分布を確定することにより、さらに地域を絞り込むことが可能である。

③a 散長翅 b 撚長翅 c 編長翅

a・b は広く分布し、c は道南の内浦湾西部、余市町、石狩川流域および樺太に分布する。

輪島市のイナウにc、深浦町のイナウにはa～cが見られた。

④a 無印 b 平面 c 平面+印 d 人面

胴印は北海道では余市を除いて見られない。b は樺太東海岸、余市および樺太西海岸ではc、dはウイльта民族のイナウ状木製品に見られる。

輪島のイナウにはbかcがあることが分かっていたが、印の面が額に接しており、これまで確認できなかった。2017年7月の追跡調査の際、地域の方の承諾を得ることができ、額から外して観察することができた。その結果、輪島2はbの胴印を持ち、樺太東海岸の資料に近い特徴を持つことが明らかとなった。

以上の検討により、本州の奉納イナウが樺太東西海岸および北海道の北部、南部にわたる広い地域で作られた可能性が高いこと、またアイヌ以外の民族のイナウ状木製品が混在している可能性は低いことを示すことができた。奉納イナウに関する共同研究は、民俗学や文献史学など複数の視点に立ちつつ、継続して行われる予定である。報告者自身の課題としては、②頭印型式の整理を進めること、並行してアイヌと和人の宗教文化に関する考察を進め、イナウが和人船頭の手へ渡った過程を探っていきたいと考えている。

(きたはら・じろうた／北海道大学・アイヌ先住民研究センター)

サハ共和国におけるエベンキのトナカイ牧畜について

中 田 篤

1. はじめに

トナカイ牧畜は、ユーラシア大陸を中心とした環極北地域で、20以上の民族によって営まれてきた主要な生業である。これまでトナカイ牧畜については、その起源や類型が研究対象とされてきたが、日常的な放牧方法についてはあまり注目されてこなかった。一方、大きな社会的変化を経験してきたロシアでは、地域の状況に適応しつつ先住民の伝統的な生業活動が存続してきた。本発表では、ロシア連邦サハ共和国におけるエベンキのトナカイ牧畜、特に現在の放牧方法と利用について現地調査を基に報告した。

2. 調査方法と対象

調査は2015年3月12～20日、2016年9月22～28日に、ロシア連邦サハ共和国アルダン郡西部のウゴヤン村に拠点を置くエベンキの氏族共同体 R を対象に、参与観察、インタビューによって実施した。氏族共同体 R は、2011年にオレーグ（仮名、58歳）が中心となって設立し、その家族・親族を中心とした11名で構成されている団体である。構成員はそれぞれ村に住宅を持つほか、氏族共同体として郊外の広大な土地に4ヶ所の居住地を持ち、一部がそこに滞在して年間を通して生業活動に従事している。冬季（10～4月）には、アムガ川の支流沿いなどに設置された3軒の小屋を一定期間ごとに使い、2班にわかれてトナカイ牧畜や狩猟をおこなっている。夏季（4～10月）には、複数の小屋や倉庫などを併設したアムガ川本流沿いの滞在地に居住し、トナカイ牧畜、狩猟、漁撈をおこなっている。R が所有するトナカイは約100頭だが、将来的に頭数を増やし、食肉を生産することを目指しているため、現金が必要なとき以外は屠畜をしていない。そのため、現在は狩猟など他の生業活動が R の主要な収入源となっている。

3. 結果と考察

3-1. 冬季のトナカイ管理と利用

3月の調査では、約50頭の家畜トナカイを管理する班に同行した。冬季のトナカイ管理は、毎朝雪上の足跡や一部個体に装着された鈴の音を頼りに放牧中のトナカイを捜すことから始まる。多くの個体の首輪には長さ60cm、径10cmほどの丸太が、前足に当たる

高さにぶら下げられ、トナカイの移動を制限していた。トナカイを発見すると、掛け声をかけたり棒を振り回したりしながら小屋の方向へ誘導し、小屋の付近に設置された囲いに追い込む。その後、投げ縄などで使役用の個体を捕獲し、残りは放置する。囲いのなかの餌台には配合飼料や塩、人尿（おそらく塩分を含むためトナカイが好む）などが入れられていた。調査中、トナカイ集めに出発してから小屋に戻るまでの時間は 30 分～1 時間程度で、小屋からほぼ 1km 以内の地点でトナカイ群を発見していた。トナカイが自発的に小屋付近に戻ってくる場合もあった。一方、聞き取りによれば、2014 年はトナカイ群がより遠くまで移動したため、集めるのに 2～3 時間かかることもあったとのことだった。

家畜トナカイの一部は騎乗用、橇の牽引用に活用されていた。R ではスノーモービルも持っているが、狩猟の際の移動には騒音が出ないトナカイが必要とのことだった。

3-2. 夏季のトナカイ管理と利用

夏季にはトナカイ集めはおこなわず、常時放牧状態で管理していた。この時期にはブヨが発生するので、家畜トナカイは遠くには行かず、人が集めなくても自発的に拠点付近に戻ってくるとのことである。夏の拠点は風が通りやすい川沿いに設置され、燻煙して害虫を防ぐための設備もあるため、害虫を避けたトナカイが集まりやすくなっている可能性がある。さらに餌台も設置されており、餌や塩などによってもトナカイを引き寄せていると思われる。実際に自発的に家畜トナカイ群が戻ってきた事例も観察された。

調査期間中に家畜トナカイが騎乗や輸送に使われた事例は観察されなかった。また R では現在はおこなわれていないが、夏季にはトナカイが搾乳対象とされてきた。6 月中旬～8 月にかけて 1～2 日に 1 回程度、基本的に女性によって搾乳がおこなわれ、乳は紅茶に入れたり、ホイップクリームやバターに加工して利用されたとのことである。一方、繁殖期が近づいていたため、野生オスが家畜メスに接近することがあり、そうした個体が狩猟されていた。つまり家畜トナカイが狩猟のおとりとなっていた。

4. 結論

トナカイの放牧管理については、放牧中のトナカイを探すための鈴、トナカイの行動を制御・捕獲するための移動制御棒、柵、投げ縄、トナカイを誘引するための餌台、燻蒸設備など、多種多様な道具・装置や技法がもちいられていた。これらの多くは近隣のエベンと共通しているため、この地域・民族に広く取り入れられた方法である可能性がある。

R では飼育頭数を増やすため、牧畜の主目的である食肉生産がおこなわれず、冬季には狩猟のための移動手段として家畜トナカイが利用されていた。屠畜せずに家畜トナカイを飼育するという状況に置かれたため、結果的に、家畜トナカイを移動・輸送手段として狩猟をおこなう伝統的なタイガ型トナカイ牧畜に類似した形態でトナカイ牧畜を営んでいると考えられる。

一方、9 月の調査時、R では家畜トナカイが実質的に野生トナカイ狩猟のおとりとして活用されていた。このような狩猟のおとりとしての家畜トナカイ利用については、今後詳細に検討していきたいと考えている。

(なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館)